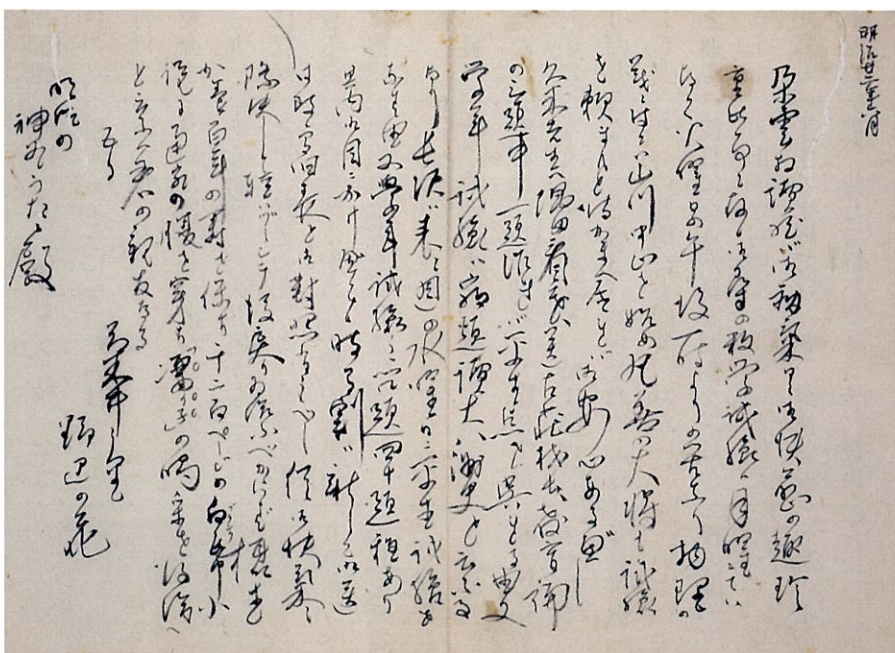


やまとの名品 天理図書館



なつめ そうせき まさおか し き あてしよかん
夏目漱石 正岡子規宛書簡

明治22年(1889) 6月5日付

縦24.7cm 横34.1cm

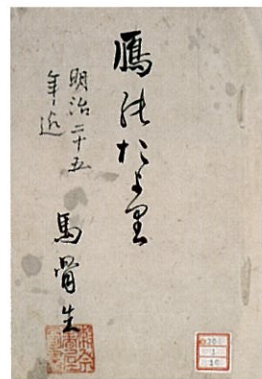
正岡子規には、明治二十五年までの来簡を整理し綴じ合わせ、自ら「雁のたより」と名付けた書簡集があります。今回紹介する夏目漱石（一八六七～一九一六）の子規宛書簡もこれに収録されており、現在確認できる全漱石書簡のうち、三番目に古いものです。

同い年の二人の交友は、第一高等中学校本科一年生だった二十二歳、明治二十二年一月頃に始まります。親交が深まりだした五月九日、子規は咯血かっけつします。口の中が赤いので、鳴くと血を吐いているように見えるホトトギスと、胸の病になりながらも、歌を詠む自分とを重ね合わせた

雅号がごう「ほととぎす（子規）」を用するようになったのは、この時からでした。

六月に入り、漱石は、実家である新宿・喜久井町から「菊井之里 野辺の花」という筆名で、学校を休みがちな子規の手紙に、掲出の返書を出します。

やはり学生が一番気になるのは、学年試験や宿題でしょう。漱石は「数学試験は月曜にてはなく火曜日の午後一時よりの筈はずなり」と書き、物理や教育論などへの質問にも回答。さらに、後日になるが新時間割を送るから旧表と対照するようにと伝えます。末尾では、「猶なほ、御快気の際は、決して軽ハヅミシテ、後戻



り為給うべからず」と諫めつつ、病状を気遣い、しっかり養生して、絶賛される小説が書けるようにと生きる希望を付け添え、親友の快癒を心から望みます。果たして、九月、二人は無事二年に進級しました。

いよいよ今年は、徳川時代最後の慶応三年に生まれた二人にとって、生誕百五十年を迎える記念の年となります。

（天理図書館 三村 勤）

天理図書館のお知らせ Tel: 0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>

◆平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）

○1月の休館日：年始休館6日まで・26日・31日

（本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）